
とある魔法とクロスオーバー

錬鉄の魔術師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔法とクロスオーバー

【Nコード】

N7365N

【作者名】

錬鉄の魔術師

【あらすじ】

いつものように不良から逃げていた上条当麻と最遊寺貴啓。やっと逃げ切ったと思いきや都市伝説の神隠しに遭う。はたして2人の運命はいかに（キリッ

第零話 不幸からの始まり？

「ちくしょー！！いったい何がどうなったんだよ！？」

「知るか！てめえのご自慢の不幸っぷりが最悪な状態で発揮したんだろ！？」

皆様はじめまして。学園都市で最も不幸だと自負している上条当麻でございます。そして、隣にいらつしやる目付きが最悪なほど悪いのはクラスメイトの最遊寺貴啓さいゆうじ たかひろ。彼も私しほどではありませんがそれでもかなり不幸な少年でございます。さて、今いったい何をしているのかと言うと……。

「……まちやがれゴラア！」「」「」

「「誰が待つかボケエ！」」」

そこら辺のゴロツキたちに追ひ回されております。え？なんでそんなに落ち着いてこんなことを言っているのかって？そんなの決まってるじゃないですか。

「ただの現実逃避だゴラアあああああ！！」

「うるせえ！！電波なんぞ受信しないで黙って足動かせ！！」

「なんだとゴラア！？元はといえば元凶はお前じゃねえか！なあに巻き込んでくれてんだゴラア！」

「うるせえ！人のケンカ最中にあんな大人数のクズどもをこっちに

引き込みさえしなかったらどうにかなってたのによ!」

「じゃあとつとあいづらを全部倒せよ!」

「数を考えるポケエ!」

だああああ!ちくしょー!もつ言わずにいられるかってんだよ!ー!

「不幸だああああ!ー!」

――――

「はあ、はあ、はあ、はあ!」

「ま、撒いたか?」

「多分な」

必死に逃げて逃げて逃げまくって約1時間。ようやく静かになったな。

「ちくしょう!なんで俺ばかりこうなるんだよ!」

最近本当にそう思うぞ。ビリビリ女に電撃浴びせられたりなんか

錬金術師とか言う物騒なもんは右腕ぶった切られたり学園都市の裏を垣間見たり天使が世界を壊そうとしたり魔術師のテロが起きたり、他にもまだまだあるぞ。ほんと、筋金入りの不幸さだなおい。

「知るかボケ。それに巻き込まれる俺の身になれ」

「んだとゴラァ!？」

「やんのか!？ああ!？」

「・・・・・・・・・・すみませんでした」

「・・・・・・・・・・っけ!」

やっぱ無理だつて。だってこいつ能力はそれこそ”低能力者（レベル1）”だけどケンカの腕は絶対学園都市トップクラスだもん。勝てるわけないぞ。

「くそつたれ。逃げ回ってたせいでずいぶんと遠くまで来たな」

「あ？ああ。そうなのか？」

「俺たちは家とは真逆の方向に走ってんだろっが。ったく。それぐらい覚えておけボケ」

「・・・・・・・・・・いちいち人の癪に障ることを言う奴だなお前は」

「知るかボケ。とつとと帰るぞ」

「分かってるよ」

ったく。今何時だ？って、うわ！もうすぐ8時じゃねえか！こりゃインデックス怒ってるなあ。

「……………そういえば、お前知ってるか？」

「んあ？いったいなんだよ突然？つか目的語がないぞ」

「いやな。ふと思い出したから言うだけだ。特に意味はない」

「……………そうかよ。んで、ふと思い出したことを言ってみるよ」

「ああ。夜の8時ぴつたりになるとどこかで異世界へいざなう亀裂が空間にできるつつう話だ」

「なんだ？神隠しって言うのか？」

「……………いったい何なんだその話は？そんなもんガセに決まってるだろうが」

「いや。そうとは言い切れない。実際に知り合いに飲み込まれたって奴もいる。まあ実際は違う場所に移動しただけだってことらしいんだがな」

「……………なんだって？」

「……………空間系の能力者の悪戯じゃないのか？」

「いや。そいつは”大能力者（レベル4）”に近い”強能力者（レ

ベル3）”の察知系の能力者でな。文字道理能力使用時はおろか、
気配ですら察知できるやつなんだよ。そいつが分からなかったつ
つたんだぞ」

「…………それは妙な話だな」

「だろ」

空間に亀裂？まさか魔術師の仕業なんじゃ…………よし。い
つたん家に着いたら土御門に聞いてみよう。何か知ってるかもしれ
ないし。

「それで、今何時だ？」

「ん？7時59分」

「……………」

「……………」

…………ここにいるのは不幸の塊の俺と結構ついていない貴啓。
……………なんか、今最悪なフラグがたったような

「…………嫌な予感がするのは俺だけか？」

「…………いや、違うな。すっげえ嫌な予感しかしねえな」

……………。

「早く帰るか」

「そうだな」

ここはもう早く家に帰った方が得策だな。うんそうだ。きっとそうだ。そうに違いない。

「さあ早くかえろ・・・・・・・・う?」

あれ? 変だな。なんで景色だけが上に上って貴啓はそこにいるんだ? っておちてるうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつ!?

「のわああああああああああああああああああ!」

「やっぱりかくそつたれええええええええええええええ!」

そして俺たち2人は亀裂の中に落ちて行った。

俺たちのこの不幸っぷりはいつたいどうなってるんだ・・・・!?

第巻話 出会い

side 最遊寺

「うおああああ！」

ちくしょー！！あの不幸の塊が！ってあいつは関係ねえか。じゃねえ！どこまで落ちんだよこれは！？つか当麻はどこ行った！？

「ああああああ？なんだ？光？よっしゃ出口が見えてきた！」

よし！いたいどこに出るんだ？つて、よく考えたら落ち始めてから結構時間経ってるから今かなり速度出てねえか？

「・・・・・・・・あ、死んだ？」

そんなことを呟くと光が漏れているような亀裂の中に入った。

「いだだだだ！！！」

ついでに着いた瞬間に横に滑っていった。

「いつて！！これ全身の皮が剥けたってこれ！！！」

俺は下方向に落ちていた筈なのになぜ横に行っただんだ？

「いつてて。た、助かったか・・・・・・・・。そっいやっどっだ？」

辺りを見回しても全く見覚えのない場所だった。地面は芝生で正面には小規模な林、後ろには少し大きめの建物、人はちらほらいる程度、遠くにはビルが何本か建っていたがそんなに多くない。

「なんだ？学園都市にこんなところあったか？」

とりあえず歩き回ってみよう。

そう思いその場から去ろうとした、その時

ガサガサガサ！と背後からでかめの生物が森を横断しているような音が聞こえた。

「っ！？なんだ！？」

そう言って後ろを振り返るとそこには根をうようよと動かしている木の化け物がいた。

「……………なんだこれ？どっかに操作系の能力者がいるのか？」

辺りがギャーギャー叫び、逃げ回っているなか、俺はわりかし冷静に見ていた。

「……………そういやなんで学生が逃げ回っているんだ？まだレベルが低いのか？つか”アンチスキル警備員”か”ジャッジメント風紀委員”はまだ来ねえのか？白井辺りはすっ飛んで来そうなのにな」

そつづつづつ言っているといきなり複数の根が俺に襲いかかってきた。

「おっと。あつぶねえあぶね」

もちろんひょいっとそれをかわす。
にしても動き滑らかだな。相当レベル高いやつが動かしてるな。
そう思いながら避け続けていると

「な、なんやこれ!？」

背後から少女の声がした。

振り返ってみると学園都市ではなかなか見られない車椅子に座っている茶髪の少女だった。しかも結構な美少女。

「車椅子？筋ジストロフィーか？」

そう呟きながらもう避けるのが面倒くさくなつたから真横に跳んだ。

「おいっ!？」

すると当たらないと判断したのか木は攻撃対象を変えたのか器用に根を動かして少女に迫ったしかもいい早さで。

「くそつたれが!」

慌てて木に近づき自身の人格を変貌させた。
すると辺りからある一点に向かって豪風が吹き荒れる。

「ぶっ 飛べ木偶の坊が!!」

木とは少し離れた場所から掌底を放つ。手は当たっていないが木はハンマーでブッ飛ばされたように飛んで行った。

オブジェクトプレッシャー
”物体圧迫”。

俺の本来の力の名前だ。

この力は離れた場所のあるはずのないベクトルを創り出し物体を押しつけ、さらにその物体を自由自在に操ることができるし、自分の力以上の力を創り出すことができるし、逆に0にすることもできる、かの有名な学園都市No.1の一方通行並みのベクトル操作系のチートじみた力だ。

木をブツ飛ばしたのは空気を一点に圧縮させてハンマー並みに堅くして打ちつけただけ。

だがこの力にも一応難点はある。一点に集めるだけなら感覚でいつでもできるが離れた場所と言ってもせいぜい10mぐらいの半径内でしか創れないし、その範囲外に行くと圧迫はできなくなる。細かく操るなら半端ない集中力がある。大雑把ならある程度で十分なのがかなり助かるが。そして、このベクトル変換の個人的に一番の難点はベクトルを単純にしか操れない点だ。一方通行のように反射なんて芸当はできないし、物体を操るのだってカクカクに動く。まあ相手の攻撃の力の大きさと同じ力の大きさを相殺できるからよしとしているんだが。

普段は軽い力で物体を浮かす程度の力しか出ないように違う人格を使っている。違う人格というのは、要は俺は多重人格者だ。いや、実際は多重人格者に限りなく近い精神異常者というべきか。以前小萌が授業で言っていた多重人格者の”デュアルスキル多重能力”の実験がどうのこうのと言っていたが俺のはそれに近く、俺の場合はレベルが落ちるというものだ。こうなったのは実験でそうなったんじゃない。本当にいつの間にかこうなっていたのだ。まあトラウマ云々はもちろん存在するんだがあまりいい気分にならないからここでは言わない。この力はたった1人を除いてとして教えていない。この力が知れたらおそらく、いや、絶対にどこかのバカな科学者が俺に目を付けて実験するにきまっている。もちろん信頼できる人はいくらでもいる。けどどこに目があるか、耳があるかなんて分からない。

まあとりあえずそんな感じで木をブツ飛ばしたはいいんだけど・・・

•
•
•
○

「へ？な、なんや？木が飛んで行った？」

……この少女をどうしようか。なるべく俺が出した能力だとは思われたくないしな。

一応選択肢はある。1、驚いたようなふりをして急いで少女を別のところに移動させ、木は誰かに任せろ。2、気絶させて木をフルボッコにして夢オチだと思わせる。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

既にこの子の前でブツ飛べと言つちまつたから1は無理か。2にしよう。偶然見られてるってこともあるかも知れんがそんな時はそんな時で何とかするか。あの子には悪いけどまあ仕方がないってことにしよう。とはいえ、いきなりやるのはどうかと思うしな。もうなるようになれっていくか。

「大丈夫か？」

とりあえず少女に話しかける。そうしないとなんか後々罪悪感がひどくなりそうだし。

「へ？あ、うん。あれ、お兄さんがやったの？」

な。よし。ごまかそう。

「いや違う。多分どこかの念動能力者が飛ばしたんだろう」

「て、てれ？」

ん？念動能力者を知らない？まだ習っていないのか？

「なんだ？授業で習っていないのか？それとも聞いていなかったのか？」

「……いかん。これ以上話しているとやりにくくなる。さつさとやるか。」

「え？えつと……っ！」

何か言おうとした少女は突然顔を強張らせたと思ったらゆっくりと前に倒れかかってきた。それを俺は抱いて止める。

「……悪いな」

もちろんやったのは俺だ。後ろの方で小さい空気の塊を創ってそれを使って気絶させた。

にしてもこれは罪悪感が半端ないなほんと。

「さてと。んじゃ、さつさとこの化け物を潰すか」

そう言つてとある一角を見るとそこにはいつの間にか立ち上がっていた木がこつちに向かってくるていた。

「俺と力比べをしようつてのか？上等だゴラァー!!」

そう叫び俺は創り出す。創り出すのは木の持っているベクトルとは真反対でかなり範囲の狭い、というより薄いベクトル。後は来るのを待つだけ。そして……

「ザクツとなあ!!」

俺の言葉道理に勢いに抗えず、あっさりと横に真っ二つとなった。

「そしてチエックメイトお!!」

その言葉を発すると同時に木を文字道理に潰した。というより圧縮した、と言え方がいいか。木はもう木の形はしておらずあったのは10?の小さな球が2つあるだけだった。

「・・・・・・・・なんかあっけなかったな」

もしかしてまだ能力者がいるのか?だとしたらまずいな。またあんなことになるかもしれねえし。

そう思って小さな球となった木を林の中に能力で放り投げ、その場から去ろうとした。

「・・・・・・・・なんでだ?」

気絶させた少女の手が俺の制服をいつのまにか掴んでいた。
いや本当にいつのまに掴んだの?

「・・・・・・・・とれねえ」

え?何この握力?結構本気で引きはなそうとしてるのに全然ビクともしねえって男としてと言う以前に年上として自信がなくなってきたんだけど・・・・・・・・。

「・・・・・・・・まいった」

はあ。いったいどうしようか。さっきので大体の人がいなくなっ
たしな。ここが第何学区なのか聞けねえな。仕方ねえ。誰か来るまで
こうしてようか。

—————

side上条

「い、いててて………。な、何なんだ一体？」

目が覚めたような感覚。おそらく気絶していたんだろう。不幸中の
幸いと言すべきか日ごろの行いのせいというか、まあどっちでもい
いんだがとりあえず目立つたけがはなかった。
まあそこら辺はいいんだが………。

「ここどこだ？」

本当にどこなんだここは？どこかの公園と言うのはわかるんだが、
学園都市内では珍しいアナログ時計を見るとちようどお昼の時間帯
だった。

だからここには俺以外誰もいないんだな。納得納得。

「って、そんなのんきなことを言ってる場合じゃねえ！」

俺は確かに夜の8時にどこかの路地裏にいたんだ。時間帯は気絶し

ていたからその時に時間が経ったんだろう。だけどどうしても腑に落ちないことがある。

「なんで場所が変わってるんだ？」

レポートか？いや、幻想殺し^{みぎて}が反応して移動は無理だろう。白井の時もそうだったし。だったら記憶操作系か？それでもないな。さつき頭を触っても何の反応もなかった。だから記憶の操作もない。

「……………一体どうなっているんだ？」

まさかまた土御門が、魔術関係のことで頼むぜい。とかいって俺を気絶させて送り込んだか？いや、だったら貴啓も巻き込むことは……………。

「ってそうだ！貴啓！あいつ一体どこに行ったんだ？」

そう言っただけを見回すがさつきも言ったように全く人影がない。

「……………まさか違うところに飛ばされたのか？」

……………不幸だ。いや、もうそう思うしかないだろ。いきなりわけのわからないことが起こって巻き込まれるわからない場所に来るわ。よく口に出さなかったな俺。

「とりあえず、歩くか」

ここにいてもなにも起こらないもんな。まあ起こることの大半は不幸なことなんだけど……………。

「・・・・・・・・ん？」

ふと、左の足元に青く光るものが見えた気がした。

「・・・・・・・・なんだ？ビーズか？」

そう呟きながら拾ってみるとそれは種の形をした青い宝石だった。

「・・・・・・・・なんだろう。なんかこれを持っているものすつこいことに巻き込まれそうな気がするのなんでだろう・・・・・・・・」

宝石を見た感想がこれなのはおそらく俺だけなんだろうが、冗談抜きになんだかこれは不幸の匂いがぶんぶん漂ってきてる・・・・・・・・。

「・・・・・・・・まさかな」

きのせい。うん。気のせいにきまつてるさ！そうに決まってるさ！！自分にそう言い聞かせさつさともあつた位置に戻そうとした。

すると

「・・・・・・・・それを渡してください」

「・・・・・・・・・・は？」

声のした方を見るとそこにはオレンジ色の髪にナイスバディーな犬耳と尻尾が付いているお姉さんとやけに露出度の高い服を着たいたい9歳頃の子金髪美少女が空を飛んでいた。片手に斧のようなものを持って。

「・・・・・・・・はい？」

「聞こえなかったのかい？あんたの手に持つてるその宝石をこっちに渡しなつて言つてんだよ」

は？は？いや、な？え？なんで空を飛んでらっしゃるの？

「・・・・・・・・バルディツシュ」

『Yes sir』

「え？なに今の声？」

どこからか聞こえた機械的な声に驚き、辺りを見回す。ガードロボツトに音声でも付けたのかと思つたが辺りにあるのはなにもない。

「な、なあさつきの・・・・・・・・・・はあ？」

自分でも意図していない変な声が出た。いやだつて仕方ないだろう？なんせ少女の周りにいつの間にか金色に光る何かが何個も浮かんでいたんだから。

「シュート！」

その言葉とともにその光は俺目掛けて発射された。

「な、何なんだ一体！？」

初めは”電撃使い（エレクトロマスター）”の電撃だと思つたけどそれだつたらそれを飛んでいる理由が分からない。見たことも聞いたこともない。

たこともないものに驚きながら咄嗟の反応で右手を出した。するとそれらはガラスが砕けるような音を発しながら消えていった。

「えっ!？」

「なっ!？」

相手はこのことに驚いていたが、こっちはそれどころではない。

「な、なにしゃがんだ!」

こっちは死ぬかと思ったぞ!あれが異能の力で創られたものだったみたいだから右手で防げたからよかつともものいまのは本当にヤバかったって!

「あ、あんた一体何したんだい!?フェイトの攻撃を消すなんて一体どんな魔法を使った!？」

「ま、魔法?ちょっと待て!超能力か魔術の間違いじゃないのか!？」

「あんた、一体何言ってるんだい?魔法は魔法じゃないか」

「……………は?なにを言ってるんだ?まさか本当に魔法なんてものが……………?」

「バルディッシュ」

『Yes sir』

また機械的な声が聞こえたと思ったら斧の形をしていたものがいきなり変形し、金色の刃の鎌となった。

「はあ！？ちよ、な！？こ、殺される！？」

流石に命の危険を感じ、一目散にその場から離れた。

「大丈夫です。非殺傷設定ですので」

「そういう問題じゃねええええええ！」

「……もう。なにがなんだか分からなくなってきたんだけど、言えることはただ1つ」

「だあああああ！不幸だあああああああああああ！」

俺はいつも通り、不幸っぷりはここにきても発揮したのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7365n/>

とある魔法とクロスオーバー

2011年3月18日13時58分発行